

## 有馬敏則著 『内外経済経営リスクと リスク管理』

滋賀大学経済学部研究叢書第47号  
滋賀大学経済学部 2012年、231p

酒井泰弘  
Yasuhiro Sakai  
滋賀大学 / 名誉教授

「三方よし」という言葉がある。これは近江商人の経営理念「売り手よし、買い手よし、世間よし」を端的に表現するために、今は亡き多才な本学長老教授・小倉栄一郎氏が創作された造語であるらしい。この有名な言葉は——造語であるか否かに関係なく——有馬敏則氏の意欲作『内外経済経営リスクとリスク管理』の内容を形容するのに相応しいように思われる。洒落て表現すれば、「書き手よし、読み手よし、皆殆どよし」ということになるだろうか。もしも本書が非売品としての大学叢書でなく、世間に出回る一般出版物であったならば、「殆どよし」を「全てよし」という表現に代えるのに吝かではないだろう。

評者と著者との個人的付き合いは10年程度で余り長くない。だが、この期間に評者が著者から受けた印象は真に鮮明であり、生涯にわたって忘れぬ「人生の導師」の一人である。まず、著者が受講学生数1250人で階段教室を溢れさせた大学記録(?)の持ち主であることは特筆すべきだろう(ちなみに、評者の最大学生数は1050人にすぎない)。次に、病院での定期透析を必要とする御病身でありながらも、遙か海を越えて大連なる東北財経大学へ連続出張講義に嬉々として赴かれた御様子は、同道した評者の目には「現代の鑑真和上」のような神々しさをいたく感じざるを得なかった。さらに、著者は「朝日新聞・滋賀大学パートナーシップポジウム」(2009年5月)の中心的推進者であり、評者自身も「近江商人に学ぶ」という名企画を側

面支援できたことは大変貴重な経験であった。すべて感謝、感謝の至りである。

本書は9章構成であり、それに補章「近江商人のリスク管理——三方よしと陰徳善事」が追加されている。本書を通読してみて深く印象に残ったのは、まず一番目に補章、さらには直前の第9章「国際通貨制度の動揺と国際金融リスク管理」である。始めの所よりも最後の所から一層大きな感動を得たことは、「終りよければ全てよし」という金言にも通じるものがある。だが、以下では第1章の内容から順次紹介し、評者の感想を随時加えるのが書評としての礼儀作法であろう。第1章は「金融リスクとリスク管理」と題されており、本書の見事な導入部分を構成している。金融リスクの種類として、信用リスク(credit risk)、市場リスク(market risk)、流動性リスク(funding and liquidity risk)、決済リスク(settlement risk)、オペレーショナル・リスク(operational risk)、法的リスク(legal risk)、その他の金融リスクまでを広く包含しているのは一応適切かと感じる。ただ、「リスクと不確実性の経済学」を専門とする評者としては、計測可能な諸々のリスクに加えて、計測困難な不確実性の問題までも分析範囲内に入れて頂きたかった気もする。

第2章の主題は「カントリーリスク管理とBIS統計」である。竹島の帰属をめぐる日韓関係の軋みや、尖閣諸島の領有権に関する日中間の諍いと、大陸中国における日系百貨店の襲撃・略奪、さらには

日系企業に対する異常なボイコット騒ぎを見ていると、カントリーリスクの研究は非常にタイムリーな話題である。ただ、こういう騒動はすべて十分に予見されていた訳でなく、少なくとも一部は予想を超える「不確実性」に属するものと言えそうである。第3章では「世界大不況と証券化リスク管理」が問題にされ、とりわけ1929年の大恐慌と2008年からの大不況との比較分析に研究の焦点が当てられている。著者が力説されるように、「証券化の原点に立ち戻って、現実根拠した前提の下で、証券化を行う事が、究極の証券化リスク管理と言える」(49頁) だろう。だが思うに、証券化の「原点」になかなか立ち戻れず、嫌なことは都合よく忘れるのも、人間の悲しい現実なのである。

第4章においては、「社会保障費拡大とソブリンリスク管理」が議論されている。国の深刻な財政赤字とソブリンリスクの可能性との関連で、高齢者医療制度の持続可能性の問題が図表的に綿密に分析されている。第5章は前章との絡みで、「財政投融资資金と国債市場のリスク管理」が詳細に説明されている。結論として、「国民の資金を長期的・安定的に運用されるためには、国債のリスク管理を始め、より一層の運用資金のリスク管理の深化が望まれている」(113頁) と結論されている。これら「双子の章」における著者の筆の運びは実に丁寧で、しかも多数の図表の援用があり、評者はここに「有馬流」の精髓を見るような気がする。千名を越える大勢の学生が階段教室の席を取り合う理由の一端を垣間見るようである。

第6章から第9章までの後半の4章は、国際金融面におけるリスク管理を多角的に論じている。まず、第6章「ヘッジファンドの動向と国債資金移動のリスク管理」では、ヘッジファンドの抱えるリスクとして、市場リスク(時価変動リスク)、流動性リスク、信用リスク、詐欺・重過失リスク、法務リスク、

制度リスク、およびオペレーショナルリスクの七つが列挙されているのが印象的である。米国系ヘッジファンドでは、ノーベル章受賞者二人や元連邦準備銀行副委員長などを含む「ドリームチーム」と呼ばれたことがあるが、これがバブル崩壊という「悪夢」を生んだことは、人間の愚かしさを如実に示していよう。第7章「SWIFTと国際決済ネットワークのリスク管理」では、いわゆる「スイフト」(Society for Worldwide Interbank Financial Telecommunication、国際銀行間金融電気通信協会)のシステムとしての特徴が、御人柄を想像させる丁寧さで説明されている。第8章「準備通貨の多様化と為替リスク管理」と第9章「国際通貨制度の動揺と国際金融リスク管理」においても、いわゆる「有馬流」の筆致が全開である。とにかく親切丁寧であるために、読者が内容を理解するのが楽になる位である。参考文献を見ると、浜矩子氏と竹中正治氏というように、対極に近い立場の論稿まで渉猟されており、著者の学問的バランスの良さが伺える。評者の見る所、この第9章こそが本書の白眉の部分である。

そして、最初に言及した「補章」と題した最終章が現出するのだ。ここでは、リスク管理者としての近江商人の役割が非常に巧みに述べられており、とても補章とか補論とかいう扱いで軽視されるべきではないだろう。「近江商人の三方よしと陰徳善事」、「進取の気性やチャレンジ精神、リスク管理にたけ国際的にも通用する経営センス」(230頁)は、リスクの時代における経済社会の復活再生のために不可欠なファクターである。思うに、有馬教授御自身が「現代の近江商人」を体現されているのかもしれない。「アリマ上人に続け!」というのが、評者の率直な感想なのである。